1. **離れていても響く声**
2. **古川桃流**
3. **あらすじ**

アパートメント鉤括弧の一階、カフェバー「ＳＴＯＮＥ」は今日も静かに営業している。けれど店主は、退去後の店舗物件が見つからない、娘の進路も決まらない、と悩みが尽きない。そんなとき娘が、お客さんのビデオ通話を助けたのがきっかけで、お店でオンラインとオフラインを交えたパーティを企画することに。いまどきのＩＴ事情に詳しい娘がどんどん進めていくが、開店直前に音響トラブルが発生する。

　スマホがブブブと震える。午後十時半のアラーム。目の前にいるお客さんは、注文する気配がない。今ならバーカウンターを空けられる。

　八人が座れるカウンターの端から客席側に出ると、靴の底から、ザラザラした滑り止めペンキの感触が、伝わってくる。

　木製のドアにはガラス窓がついているけれど、店内が明るいので、外はよく見えない。そっと開けると、カランコロンとドアベルが静かに響く。涼しいと暖かいの間くらいの空気が、顔にあたる。もう四月になった。

　ドアノブに引っ掛けてある「ＯＰＥＮ」のサインを、裏返して「ＣＬＯＳＥＤ」にする。窓には、小さな文字で、カフェバーの店名「ＳＴＯＮＥ」のロゴをあしらってある。店を譲り受けたとき、私の姓である石谷からとった。すぐに変えるつもりだったけれど、結局、十年以上この店名でやってきた。

　ガラス窓ごしに中が見える。壁はクリーム色、家具はナチュラルウッド調で、無印良品の店のようだ。このくらいが、気負わなくていい。格好つけすぎても、雑然としすぎても疲れる。

　店内に戻ると、全力で稼働している換気扇の音が聞こえる。何度目かの自粛要請のときに大きな換気扇を取り付けて、のらりくらりと営業を続けてきた。静かなお客さんが多いので、話し声よりも、換気扇が近所迷惑にならないか気になるくらいだ。

　カウンターの八席のうち、三席が埋まっている。ドア側のカップルは、いつも二、三杯きれいに飲む。奥側のひとりは、私と同じく四十代男性の大野さんだ。仕事帰りにカジュアルなジャケット姿で現れて、ゆっくり飲んでいく常連客だ。夫婦で来ることもあるし、今夜のようにひとりで来ることもある。

　大野さんとカップルは顔見知りだけれど、席が離れているので話してはいない。さっきまでカウンターは満席で、隅の立ち飲みテーブルにも客がいた。

「石谷さん、店員さんを雇ったの？」

　大野さんがカウンターの奥を見ながら、話しかけてくる。

「ええ。娘にね、手伝ってもらってるんです。私が肘をケガしまして」

「ケガって仕事中に？」

「いえ、仕事前に中庭で」

　先々週の日曜日、中庭の桜のあたりに、人が集まっているのが見えた。近づいてみると、このアパートに住んでいる常連客だった。

　ひとりは三十代の須藤さんという男性客で、いつもドイツの黒ビール「ケストリッツァー」を飲む。もうひとりは、最近一緒に来る青年だ。ふたりとも二階のＷｅｂ制作会社に勤めていて、家賃補助で三階、四階に住んでいる。

　中庭に埋まっているタイムカプセルを探している、と言っていた。一緒にどうですかと誘われて、そうですね、とあいまいな返事をしたのを思い出した。開店準備はできているし、お客さんからの誘いなので、ちょっとだけ手伝おうか。軽い気持ちで、近づいて挨拶をした。

　小さな庭だからすぐに見つかると思ったが、スコップ片手に掘り進めても、土がひっくり返るだけで、何も出てこない。目星がついているだけに、もどかしく、かえって使命感のようなものが湧いてくる。

　問題がなんとか解けそうだと感じるときほど、挑戦したくなるものだ。電車の中吊り広告の受験問題は、一問目が簡単だと、二問目を解きたくなる。キャバクラで人気が出る要因は、容姿ではない。「俺のことを好きになるんじゃないか」と思わせられれば人気につながる。

　タイムカプセルは見つからなかったが、開店時間が近づいたので、挨拶をして店に戻ることにした。

　中庭から店の裏口まで歩きながら、娘のことを考えた。普段は、遠くに住んでいる自分の娘を気にしないのに、長い休みでこっちに来ていると、アドバイスや小言を言いたくなる。これも似たような話だ。解決できそうだと、解決したくなる。そんなことを、ぼんやり考えていたのが、いけなかった。

　木の根につまづいて、地面に手をついてしまう。

　肘が痛んで、動かせない。

　須藤さんたちが駆け寄ってきて、起こしてくれる。店を手伝うと言ってくれたが、そうもいかない。私が勝手にころんだだけなのだ。ただ、その日はビール樽の配達があって、店の冷蔵庫まで運んでもらうのだけは手伝ってもらった。

「へー、そんなことがあったんだ。大丈夫？」

　大野さんが、私の肘を見る。

「お医者さんから、脱臼してるから安静にするように、って言われましてね。そうしたら娘が手伝ってくれると言うので」

「さすが石谷さんの娘さん、いきなりお店に出られるんだ」

「最初は飲み物だけお出しして、時短営業でした」

　娘の弥生は、先月から春休みで、こちらに来ている。ときどき皿洗い、掃除、ちょっとした片付けを手伝ってもらっていた。接客はしない。お客さんに話しかけられると、緊張して焦るらしく、いつも下を向いて仕事をしていた。一度だけ、高校生くらいの女の子のお客さんと話しているのを、見かけたことがあるくらいだ。

　接客の経験がないのだから仕方がない。

　私だって、十年ほど前に、半導体メーカーの技術職をリストラされたときは、大変だった。キャバクラの呼び込みやホールの仕事にありついたものの、客や店長に愛想が悪いと叱られたものだ。

「娘さんが作ってくれたホットドッグおいしいよ」

「パンがおいしいんですよ。そこの、みなとやさん」

　私はシンクにたまった皿やグラスを洗いながら、弥生に水を出すように言った。大野さんは酒が進むと、水を飲むのを忘れる。

　弥生は、大野さんのグラスをひっこめて、水を注いでからグラスをカウンターに戻した。

「ありがとう。この仕事はもう慣れた？」

「えっ、あ……はい」

「どうもはじめまして。大野っていいます。仕事帰りが多いんだけど、最近、忙しくってね。二週間ぶりくらいかな。ひとりで来ることもあるし、妻と来ることもある」

「あ、はい」

「今日は、妻が出張でいなくてね」

「ああ、はあ」

「前に、ここでビデオ通話をしたんだけど、逆光で暗くなるんだよね。あと声もうるさくなっちゃうし。それで小声で話してたら、聞こえないって言われるし――」

「アプリは何を使ってるんですか？」

　弥生が話をさえぎる。大野さんは酔いが回っていて、いつにもまして寛容だ。いらついている様子はない。

「えーっとねぇ、この緑のやつ」

「それだったらハードウェアでホワイトバランス調整するウェブカムがいいです。ＵＳＢのＴｙｐｅ　Ｃなら帯域は十分です。それから、単指向性のマイクをつけたらいいと思います。店の換気扇が強くて、風の音が入るかも知れないので、ウィンドスクリーンをつけると聞きやすくなります。持ち運ぶなら――」

「詳しいんだねぇ。そういう機材を持ってるの？」

「はい。きちんと録画するときは、デジイチとスタジオマイクで取り込んで、後でデスクトップで編集して、エンコードかけてます。外でライブ配信するときは、帯域が大きすぎると上り回線がきつくなるので、ウェブカムで撮りながら、データが小さくなるエンコーディングを使います。それから――」

「そういうの好きなんだね」

　弥生が、以前から配信がどうとか言ってたのは、これのことだったのか。よく分からないので、聞き流していた。

　大野さんが楽しそうに笑いながら、話を続ける。

「今もそういう機材もってるんだったら、試してもいい？」

「ちょっと待っててください」

　弥生がカウンターの奥に戻って、自分のバッグからタブレット、カメラ、ヘッドセット、マイクを取り出す。

「仕事が始まるまで時間があるときに、ここで配信してるんです」

　弥生はヘッドセットにアルコールスプレーを吹きかけて、拭き取ってから手渡す。大野さんがそれを頭につける。弥生はカメラの位置や方向を調整し、タブレットで何かアプリを立ち上げたようだ。

「このカメラで撮ると、顔が明るく映るんです。こちらのマイクに話してみてください。あ、もっと小声でも大丈夫。はい、そのくらいでオッケーです」

　私が、カウンターの端のカップルに、うるさくないかと尋ねる。カップルは、弥生たちをちらっと見て、大丈夫ですよと微笑んだ。

　大野さんはタブレットの画面を見ながら、明るい声で話し始める。

「石谷さんの店からつないでるんだ、娘さんがセットアップしてくれた。何飲んでるの？　僕はビールだよ、ニューイングランドスタイルのエールで――。うん、うん。ときどき見かけるお客さんもいるよ。うん、え？　話すの？　ほんとに？」

　大野さんの視線に気づいたカップルが、どうしましたと尋ねる。

「すみません。いま、妻とビデオ通話でつながっているんですけど、話したいと言ってまして」

　弥生がタブレットを操作すると、一瞬、キーンとハウリングする。慌てて弥生が音量を調整をして、音がおさまった。

　大野さんとカップルが、タブレットの向こうの大野さんの奥さんと話し始めた。こんばんは、今日はどちらにいるんですか、何飲んでるんですか、こっちは春らしい天気ですよ、そちらはまだ寒いんですね。

　大野さんはカップルにお酒を一杯ずつおごり、カンパーイと言って、ぐびっと飲み、ビデオ通話で他愛もない話を続けた。私はグラスに水を注ぐ。

　大野さんがじゃあまたと言って、通話を終えたとき、カップルはすでに帰っていた。

「楽しかった、ありがとう。弥生ちゃんだっけ？　一杯おごるよ」

「あっ、いえ」

「遠慮しなくていいんだよ」

「その、お酒はあんまり……」

「そうなんだ。ごめんごめん。無理に飲まなくていいよ。じゃあ、石谷さんどうぞ」

　私は、自分用にビールを一杯注ぎ、いだただきますと言ってから口をつける。

「ほんとは、弥生ちゃんにおごりたいんだよ。ちゃんとバイト代あげてね」

　サービス料として、メニューに入れておきましょうか、と冗談を言ってみる。すると、大野さんは真顔になった。面白くなかったかな、と不安になる。

「それが、いい」

　と、大野さんは力強く言った。

「それがいいよ。うん、いいじゃん。またやりたいから、メニューに入れといてよ。弥生ちゃんもそう思うでしょ。できるでしょ？」

「今日みたいに複数人でやるなら、各自がピンマイクをつけて、ミキサーに接続したほうがいいですね。会議室用のマイクだと、お皿を洗う音や、遠くの雑談も拾っちゃうので――」

　弥生は機材のことを延々と話し続けた。大野さんは、ほとんど分かっていないだろう。私は、奥さんと仲がいいですね、と割り込んだ。大野さんがはにかんで、頭をかく。

「でも、それだけじゃなくてね。遠くに引越したお客さんとか、都合でお店に来られない人と話せるのいいでしょ。この建物も、もうすぐ取り壊しだし。お店がよそに移ったら、足が遠のくかも知れない。それがビデオ通話でつながるならいいじゃん。お金を払ってでもやりたいよ、ほんとに」

　私は、そうですね、とあいまいに答えておいた。

　閉店後、トイレを掃除してから戻ると、弥生がカウンターを水拭きしていた。

「お父さん、この建物の取り壊しって、いつだっけ」

「今年中だったかな。退去期限はもっと早くて、あと四ヶ月」

「次のお店見つかったの？」

「そのうち見つかるよ。補填費用も出るから、急がなくていい」

　このアパートメント鉤括弧には、ずいぶん前から取り壊しの噂はあった。先月の三月、急に正式な日程が決まったのだ。とはいえ退去費用だけでなく、事業の補填費用も出るから、一年くらいは仕事をしなくてもやっていける。

「近くには空いてる物件がないって言ってたよね。どこに引っ越すの？」

「似たような町で探してる」

「今のお客さんはどうするの？」

　こうやって細かく突っ込むところは、母親似だ。

　十年前、私はリストラされた後で、キャバクラの呼び込みの仕事で食いつないでいて、収入と生活が不安定だった。

　地方都市の実家近くで新しい職を見つけた妻は、離婚届を持ち出した。弥生は思春期だったし、計画的に看護師の仕事を継続している母親のほうが、頼りになったはずだ。それ以来、弥生のことは妻、というか、その元妻に任せっぱなしだ。年に一度か二度、弥生はうちに泊まっていく。不便はありそうだったが、不幸そうではなかった。

　大学を卒業する歳になり、最後の春休みということで、今はうちに来ている。

　私は補填費用を、就職祝いとして弥生に渡せば、親としての役割が終わると考えていた。これからは気楽にひとりでやっていけると思っていたのだ。

　ところが弥生は卒業後の進路が決まっていない。やりたいことがあるのか、要領よくやっていきたいのか、何かチャレンジをして挫折をしたのか、あるいは困っていることがあるのか。就職が決まっていないことだけが、確定している。

　悪いことは続くもので、近所の不動産屋を回っても、空いている物件が見つからない。別の町で店を開いて、一から商売を始めることになる。客がつくまでは売上がなくて、補填費用を弥生に渡せないかも知れない。

　テーブルを拭いている弥生を見る。この店のアルバイトのせいで、弥生の就職活動がおろそかになっていないだろうか。

「弥生こそ、就職活動は進んでるの？」

「うん、まあ」

「お母さんはなんて言ってる？」

「ああ、うん」

　こういう、あいまな返事がをするところは、私に似ている。まじめな元妻は気をもんだだろう。

「タブレットとかカメラで何やってんの？　変なことしてない？」

「大丈夫、バーチャル動画配信だよ。アバターをかぶせるの。アダルトコンテンツとかじゃないよ」

「チャンネル登録とか多いのか？」

「うーん、まだまだ」

　まあ、そうだろう。何万人も登録者がいたら、それで稼げると聞いたことがある。

「ＩＴに詳しいんだったら、そっち方面でバイトでもやってみたら？」

　弥生はうなずくが、返事をしない。布巾を握り、こちらに背を向けて離れていく。

　突っ込んでいいのだろうか。それとも黙っているほうがいいのか。あるいは、きちんと返事をしろと叱ったほうがいいのか。態度が悪いわけでもないし、悪い遊びをしている様子もない。けれど、ちょっとしたことで、黙ってしまう。そこから、どうやって話をつなぐのがいいかも分からない。

「弥生、聞いてる？」

「聞いてるよ。ねぇ、だったら、オンラインとオフラインのハイブリッドパーティしようよ」

「ハイブリッド何だって？」

「大野さんが言ってたでしょ。お店に来られない人や、遠くに引っ越した人と、このお店でビデオ通話したいって」

　引っ越した人が、いまさら、ここの常連や私とビデオ通話をしたいと思うだろうか。積極的に連絡先を尋ねたこともないので、気が引ける。ＳＮＳでは、つながっているけれど。

「この店はあんまり賑やかじゃないからなぁ、他のお客さんの迷惑になるし」

「今日のお客さんは、うるさくないって言ってたよ。お父さんがＩＴの仕事したらって言ったんだよ」

「それ仕事じゃないだろ」

「大野さん、お金を払ってもいいからやりたい、って」

　だが、商売として成立するだろうか。ビデオ通話は無料でできる。わざわざ金を払わせるのか。遠隔のお客さんに食べ物や飲み物を提供できるわけでもない。

「お父さん、考えとくって言ってたよね。大野さん、返事を待ってるよ。そのままフェードアウトするの？　お父さん、困ると返事を先延ばしするよね」

「それは……」

　弥生だって同じだろうと言いかけて、やめた。残念ながら、私に似たのだ。

　有料にするかどうかは別にして、やってみようか。最悪のシナリオでも、大野さんと弥生だけが盛り上がって終わり、というところだろう。今夜やってたことを、もう一度やるだけだ。

「そんなこと、ほんとにできるのか？」

「大丈夫だよ。お店と家にあるタブレットとかでできるよ。マイクを買い足すかも」

「まあ、それくらいなら、いいけど」

「やったー」

　ゴールデンウィーク初日、四月二十九日のハイブリッドパーティが、よい選択だったのか自信がない。もしトラブルがあって解決に奔走したら、残りの連休を心身ともに疲れたままで営業しなければならない。一方で、疲れ切っているゴールデンウィーク後半に、慣れないパーティをするのも不安だ。

　けれど、決めてしまったんだから仕方ない。連休初日の今日、ハイブリッドパーティをするのだ。時計を見ると午前十時、開店まで五時間ある。慣れないことをするときは、早めに準備を始める。時間が余れば、座ってうたた寝すればいい。

　カウンターの中の足元にある空箱や使わない調理器具を、裏の収納に移動させる。ついでにカウンターの上の小物もどけて、スペースを作る。今日はばたばたするだろうし、配線関係で予想外のことが起こるかも知れない。

　あっという間の三週間だった。

　ハイブリッドパーティーが決まったとき、複数のマイクやスピーカーを使う場合の構成を考えてみた。信号処理が必要かも知れないので、押入れから電子部品や機材を引っ張り出してきて、ほこりをはらって、つないでみたりもした。

　ところが、いざ弥生を助けてやろうと話しかけても、話が噛み合わない。ほとんどの信号処理はタブレットやパソコンのソフトウェアで解決するという。映像の明るさも、カメラやパソコン側で調整できるので、店の照明もそのままでいいらしい。

　それでも私は、理論的には大丈夫かも知れないけど、動作確認したほうがいい、とアドバイスした。弥生はため息をついて、もう試したと言う。実際に動いているところを見せられると、私は黙るしかなかった。エレクトロニクスの仕事を離れて、酒を出していた十年ほどの間に、ソフトウェアが恐ろしく進歩してしまった。それとも、弥生が飛び抜けて優秀なのか。私には判断できなかった。

　念のために店でも確認したらいいんじゃないかな、音のはね返りとかも違うだろうし、という私の助言に、弥生は顔をしかめた。

　大丈夫だよ。お父さんは、配信アプリのこと分かってないよね。それにＩＴのことも。チケットだって、最初はお店で現金でとか言ってたじゃん。遠くにいる人とつながるパーティなのに、遠くの人が支払えないよ。タイムカプセルを掘っていた須藤さんだっけ？　あの人にアドバイスをもらったから、オンラインのチケット販売ができたんだよ。お父さんは回路のこととか詳しいのかも知れないけど、そういうの、今はいらないから。

　それ以来、配信に関しては話さなくなってしまった。どうなってるかと聞いても、大丈夫としか返事がない。何度かアプリが動く様子を見せてもらったくらいだ。

　裏口から弥生が入ってきた。十時より少し遅れている。さっき空けておいたスペースに機材をどんっと置いて、口もきかずに準備を始めた。

　私はメニューが書かれた黒板を、壁から下ろす。チョークを滑らせると、カッカッカッと静かな音が店に響く。きりのいい料金に変更しておけば、お釣りの受け渡しが減る。私は、黒板のメニューを書き直していく。

　キーン

　ハウリングの耳障りな音が、店内に響きわたった。

　弥生が慌てて音量をゼロにする。

　マイクに拾われた音が、スピーカーから出て、それをマイクが拾う――というのが連鎖すると、キーンというハウリングが起こる。

「家では何度もテストしたし、ここでも一度テストしたのに」

　弥生がぼそっとつぶやく。

　でも、パーティ本番での配置で、ボリュームを大きくしたのは初めてだ。ビデオ通話を経由したり、硬い壁にあたった音は、時間差でマイクに拾われる。そういう環境ではハウリングが起こりやすい。

　弥生は、ひとしきり、知り合いにチャットで尋ねたり、ネットを検索したりしていた。そして、画面を見つめたまま、動かなくなった。

「どうした」

「ハウリングが取れない」

「アプリじゃ対応できない？」

「だめみたい」

「有料アプリでも？」

　弥生はうつむいたまま、首を横にふる。チャットの履歴を覗くと、すでにそんな話は終わっていた。民生品では対応できない。専用機材は高価すぎるし、量販店の棚に並んでいるわけではない。そういうアドバイスが残っている。

「ごめんなさい。どうしよう」

　涙が浮かんでいる。

「まだ時間あるから。最悪、解決しなかったとしても、ヘッドホンを使えばハウリングは起こらないんだよな？」

「うん。でもそれだと、みんなでおしゃべりって感じにならないよ」

「分かってる。ヘッドホンは最悪のシナリオだ。お金を渡すから、マイク付きのヘッドホンを買ってきて。エコーキャンセルがついているやつ。弥生のほうが詳しいだろ」

「でもパーティじゃなくなる」

「分かってる。それが、最悪の、シナリオだ。保険だ。これからマシなシナリオにするんだ」

　私は、一旦自宅に帰る。先日、押し入れから発掘した「ＤＳＰ評価キット」と書かれた箱と、自分のノートパソコンをエコバッグに入れる。それから配線部品も必要だ。いびつな形に膨れたエコバッグを持って、店に戻った。

　ノートパソコンの電源を入れると、画面にくるくると回るアニメーションが表示される。古いモデルなので起動に時間がかかりそうだ。持ってきた機材やケーブルを、カウンターに並べていく。

「ただいま！　ヘッドホン買ってきた！」

　弥生が戻ってきた。まずは、最悪シナリオの確認だ。弥生と私はエコーキャンセルのついたヘッドホンを装着して、タブレットでビデオ通話をする。互いの声が、ちょっと反響するけれど、会話に問題はない。

「じゃあやろう。マイクとスピーカーを、こっちにつなぎ直してくれるか」

「うん」

　弥生はタブレット、ＤＳＰ評価キット、マイク、スピーカーをケーブルでつなげる。

　私はノートパソコンで、いくつかのプログラムを動かす。マイクから音を取り込んで波形を見たり、スピーカーからドレミファソラシドと音を出したりした。

「ねぇ。このＤＳＰ評価キットっていう基板？　回路？　これがハウリングを消すの？」

「ハウリングを消すように、これからプログラミングする」

「どういうこと？」

「スピーカーから音が出て、マイクに入って、それがスピーカーから出て――と繰り返すとハウリングが起こる。だからスピーカーから出た音声信号を、この回路で消せばいい」

「さっき買ってきたヘッドホンについてる、エコーキャンセルとは違うの？」

「原理は同じだ。ちょっと待って」

　私は、プログラムを改造していく。頭の中は、分厚い辞書に、人差し指や中指や小指をはさみながら、いったりきたりするのに似ている。データをメモリに一時退避しておこう、スピーカーの状態はどうだ、信号処理を追加できるか、おっとメモリはどうなってたっけ……。

　途中で話しかけられようものなら、保留していた思考が一気に消え去ってしまう。ページに挟んでいた指が、すべて抜けるように。

「よし、だいたい形になった。えーっと、何の話だったっけ」

「ＤＳＰとヘッドホンの違い」

「ＤＳＰはデジタル・シグナル・プロセッサーの略で、信号処理専用の半導体だ。テレビとか音響機器の中に組込まれている。けど、製品化する前に、プログラムをしてテストする必要がある。そのために、半導体と周辺回路を一緒にした基板がある。それが評価キットだ」

「で、ヘッドホンとは違うの？」

「ヘッドホンについてるマイクは、すぐ近くにあるし電気的につながってるから、消去すべき音声信号を特定しやすい。けど、今回はネットを経由してから、何秒も遅れて、別のタブレットのスピーカーから出てくる音を消す。さらに壁から反射してくる音声は、特定の周波数が吸収されてしまう。そういうのを特定するのは――」

「ごめん、ちょっと何言ってんのか分かんない。とにかく違うんだ？」

「同じだけど、複雑」

　試しにふたりで通話をしてみると、ハウリングは起こらなかった。

「完成？」

「いや、まだだ」

　私がマイクとスピーカーの向きを変えて、あーあーと声を出していると、キーンとハウリングが鳴り響く。

「大丈夫。パラメーターの調整でいける」

　プログラム内の数値を上げたり下げたりしているうちに、ハウリングが消えた。

「すごい！　こんなこと、できたんだ！　なんで黙ってたの？」

「やる機会がなかった」

　電子工作の機材を片付けていく。ＤＳＰの電子回路がむきだしだけれど、仕方ない。うっかり濡らさないように、カウンターの隅に寄せておいた。

「ねえ、お父さん」

　弥生がうつむきながら、隣に立つ。

「あの……。えっと、偉そうにしてごめん」

「うん、ああ」

「怒ってたでしょ」

「ああ、まあ。へこんでたって感じかな」

「本当にごめん」

「こっちも、ちゃんと話をすればよかった。慣れてなくてな」

　カウンターを水拭きする。

「パソコンは片付けないの？」

「後で調整できるように、置いておこう。人間が部屋に入ると、反響のしかたが変わる」

　カランコロンとドアベルが鳴って、タイムカプセル掘りの須藤さんが顔をのぞかせ、店内を見渡す。まだ準備中だったかな、と立ち去りそうになる。

　時計を見ると、午後三時だ。弥生が須藤さんを引き止めた。

「どうぞ、どうぞ。ただいま開店です」

　大野さんのような常連客や、アパートメント鉤括弧や近所に住んでいるお客さんが、入れ替わり来店してくれた。

　遠くに引っ越したお客さんや、家を空けられないお客さんには、ビデオ通話で参加してもらった。私は酒をみつくろって、送ることにした。スーパーでは売られていないビールやリキュールを、飲食店向けの酒屋さんから仕入れたのだ。緊急事態宣言中、免許無しでテイクアウト用に酒類を販売できた時期があった。今後も必要になるだろうと思って、免許を取得したのが功を奏した。

　忙しかったのは、ビデオ通話でも接客が必要だったからだ。食べ物や飲み物を出さない代わりに、純粋にコミュニケーションする。

　リモートワークに慣れたお客さんがいて、ずっと黙っているお客さんに話をふってくれた。カメラ越しに店の様子を見たお客さんが、オーダーを取らなくていいのか、と私に声をかけてくれた。おかげで、私は遠慮なくタブレットから離れられた。

　弥生は、開店前のトラブル対処でアドレナリンが出ていたのだろう。開店直後はテンションが高かった。けれど、時間がたつと接客慣れしていない弥生に戻り、あたふたした。

　代わりに大野さんが「こっちのタブレット使うね」と、不慣れなお客さんの隣に立ち、ビデオ通話のやり方を教えていた。そのたびに私は、マスクをしてくださいね、とジェスチャーで伝えた。

　十二時を過ぎて、ようやく最後のお客さん――つまり、大野さんだ――が帰っていった。

　弥生がタブレットやＤＳＰ評価キットを片付けている。

「疲れたなぁ。弥生がやってるバーチャル配信とかも、こんなに疲れるの？」

「まさか。ネタがないから、すぐに終わっちゃうよ。回数で勝負」

「そうか。それにしても疲れたなぁ。ちょっと休んでいこう」

　冷蔵庫から、弥生はジンジャーエール、私はビールを取り出して裏口から出る。そして、誰もいない中庭のベンチに腰をおろした。暖かい空気が顔にあたる。

「あのさ」

　弥生がささやくように話し始める。

「あのさ、お父さんがハードウェア、わたしがソフトウェア担当でさ。ちゃんとやったら、もっといいハイブリッドパーティができるよね」

「そうかもな」

「でもコンテンツがないね。今日はよく間がもったねぇ」

「お客さんどうしの会話がコンテンツなんだよ」

　お客さんには頼っていない、と私は自負していた。けれど今夜は、遠くのお客さんも常連のお客さんも、少しずつ気を遣ってくれた。よい酒場というのは客が作る、と言われるが、いつの間にかＳＴＯＮＥもそうなっていた。

「お父さん。この間、ＩＴ関係の仕事をしたらって言ってたよね。これって仕事にならないかな？」

「これ？」

「オンライン・オフラインのハイブリッドイベント。機材とか設営とかするの」

「それだけで、やっていけるかなぁ」

「副業っていうか。なんか、ときどきやってます、みたいな」

「それなら成立するかもな」

　この中庭で転んだとき、私は、弥生が近くにいるから口出ししたくなる、と考えていた。けれど実は、離れているときには、あまりにも手出しが難しくて、目を背けていたのかも知れない。耳を塞いでいたのかも知れない。

「弥生を正社員として雇おう」

「大げさだよ。意味ないし」

「新卒で就職しました、って履歴書に書ける」

　補填費用の使いみちとして悪くない。むしろ、素晴らしいアイデアに思える。

　風が強くなった。かすかな若葉の香りと、葉の擦れる音が漂う。見上げると、桜の枝と葉の影が揺れている。